

古代中国における貝貨の特質：貝貨を巡る諸説の経済学的検討

楊, 立国
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494559>

出版情報：比較社会文化研究. 14, pp.143-155, 2003-10-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



古代中国における貝貨の特質

—— 貝貨を巡る諸説の経済学的検討

ヨウ 楊 リツ コク
立 国

はじめに

中国南海からインド洋にかけての海岸で産出される特定種類の海貝（通常子安貝または寶貝などと呼ばれる）が、新石器時代に属する青海楽都柳湾や青海大通上県孫家寨などの遺跡で発見され、新石器時代に続く殷周時代の墓葬からは大量の出土が確認されている。当時の文字、甲骨文や金文には、貝にまつわる記述が相当多く含まれている。これらによってその時代に、貝が盛んに使われていたと判断される。春秋中期から貝の使用が衰退しはじめ、戦国時代になると貝のある墓が少なくなり、秦・漢時代にかけてその姿が次第に消えていく。

中国では、1920年代から、古代貨幣の起源について議論がなされて、その結果、「貝は中国の最初の貨幣である」（貝貨と呼ばれる）と結論されている。その間、このような理解は、古代中国を研究する多くの日本人学者にも首肯され、揺ぎないものとして、定説化されている。ところが、諸説は、古代中国の貝貨を考察するにあたって、かならずしも共同体内と共同体間とを分ける視点を有していない。殷・周社会がその共同体的性格のゆえに、独立の商品生産者の不在という特徴を有することが強調されて、共同体内において、交換手段としての貨幣は必要としなかったと推論されているのである。共同体内と共同体間を分ける視点を確立するならば、共同体間では、重要な外来品である貝は一般的等価物として扱われる可能性を十分に推論し得るはずである。この対外の「直接交換可能性」を持っていることこそ、貝が、王や公などの支配者間の互酬・贈与の手段をはじめとして、共同体内においても、人々に珍重され、交換に使われなくても、蓄蔵手段・支払手段・「価値の標準」³として用いられる根拠を成すのである。それゆえ、古代中国の貝貨を正確に理解するために、共同体間の貝の一般的交換手段機能と共同体内の貝の貨幣諸機能とを関連づけて考察しなければならないのである。

一 貝貨成立の諸説の根拠とその問題点

諸説とは以下の著書や論文によるものである。

(1)朱活「試論我国古代貨幣の起源」『文物参考資料』1958年第8期所収。(2)王毓銓「我国最早的貨幣——貝」『中国古代貨幣の起源と発展』第2章。(3)蕭清「中国貨幣の起源」『中国古代貨幣史』第1章。(4)関野 雄「中国の古代貨幣」『古代史講座』9・古代の商業と工業所収。(5)山田 勝芳「中国の貨幣の始まり」『貨幣の中国古代史』序章。(6)濱田 耕作「支那古代の貨幣について」『説林』第2巻所収。

諸説においては、貝についていろいろな角度から説明が与えられ、貝が貨幣に転化する時期についてはそれぞれ異なるが、貝が殷周時代の貨幣あるいはその一つと認識されている点では一致した結論になっている。以下では諸説の主要内容をあげ、貝貨成立の根拠とその問題点を取り出す。

中国の学者、朱活・王毓銓・蕭清三氏は、中国古代貨幣の起源について、強調されるところがそれぞれ異なるが、共通点も多い。そのうちの朱活氏の論文を中心として検討し、中国側の意見を窺うことにしたい。

朱活氏の論文「試論我国古代貨幣の起源」（中国古代貨幣の起源について）は、『管子』や『史記』など古文書の貨幣に関する記述を否定する所から始まる。「中国貨幣の起源および金属鑄貨の出現の時期について、古文献によるだけでは十分でない。しかし、われわれは貨幣発生と発展の法則によって、史的と考古学的資料を結びつけて、それを解明することができる」⁴と述べている。氏のいわゆる「貨幣発生と発展の法則」はマルクスの貨幣理論（交換過程論）によるものである。「マルクスは『資本論』の中に貨幣の発生について、このように述べている。『貨幣結晶は、…交換過程の、必然的な産物である。交換の歴史的な広がりや深まりとは、商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を展開する。この対立を交易のために外的に表そうという欲求は、商品価値の独立形態に向かって進み、商品

1 「青海楽都柳湾原始社会墓葬第一次発掘の初步収獲」『文物』1976・1

2 「青海大通上県孫家寨出土の舞蹈紋彩陶盆」『文物』1978・3

3 カール・ポランニー「貨幣使用の意味論」『経済の文明史』所収 64頁参照

4 朱活 「試論我国古代貨幣の起源」『文物参考資料』1958・8所収 以下同 34頁

と貨幣とへの商品の二重化によって最終的にこの形態に到達するまでは、少しも休もうとしない。それゆえ、労働生産物の商品への転化が実現されるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化が実現されるのである』⁵というように、マルクスの文章をそのまま引用して、次のように説明している。「マルクスの分析によると、貨幣は交換過程の必要のために結晶したものである。交換の歴史的な広がりや深まりとは、交易の便益のため、必然的にある商品が他の商品の等価物になることを要求し、最終的にはある種の商品は商品世界から分離して、貨幣形態をとる。要するに、貨幣は商品の交換過程を通じて、商品世界から分離し、他の商品に対立する特殊な商品である」⁶。つまり、貨幣とは交易の便宜のため、ある種の商品が商品世界から分離して、商品交換の等価物たるものと理解されている。続いて、「二つの事情が事柄を決定する。貨幣形態は、域内生産物の交換価値の実際上の自然発生的な現象形態である外来の最も重要な交換物品に付着するか、または域内の譲渡可能な財産の主要要素をなす使用対象、たとえば家畜のようなものに付着する」⁷という別のマルクスの文章を引用し、中国貨幣の起源について、「外来の天然品としての貝は、遅くとも殷時代の後期に貨幣形態になった。一方、中国社会内で生産され譲渡可能な有用物品である生産工具「銭」と「刀」は、違う地域と違う時期で相次いで貨幣形態になった」⁸と結論付けている。

ここでは、朱活論文の貝に関する部分だけを取り上げ、氏の貝貨成立の根拠とその問題点を考察する。

氏は、貨幣が交換過程によって結晶したものと認識し、貨幣発生において、交換の役割を重要な位置に置いている。「中国の新石器時代後期の遺跡から、遠隔地の素材で製造された精巧な石斧とその他の装飾品が発見された。貝は南からの天然品として、早く彩陶遺跡の中ですでに発見された(例えば、山西芮城の彩陶遺跡)。中国の古代の文献中には、『日中、市を為して天下の民を致し(まねき)天下の貨を集め、交易して退き、各々其の所を得しむ(欲しいものを入手させる)』とある。これは氏族間の交換情景を語っている」⁹。つづいて、「近年、安陽小屯、鄭州二里崗などの発掘によって、われわれは殷代社会の基本的な状況がわかるようになった。殷時代の後期、青銅製造業の発達のみならず、その他の建築、交通道具、紡績、醸造などの工業製品も多数発見され、相当高い技術水準に達している。われわれに手工業と農業との分業、すなわち第二次社会分業が殷後期にかけて、相当長い歴史を経ていることを推察させ

る。これだけではなく、第三次社会分業すなわち商人の出現もすでに顕著になった」¹⁰と述べ、「殷代の後期、社会分業の発展と交換の拡大は、ある種の商品が固定的に貨幣として使われる必要性と可能性をもつようになった。この商品は最初に貝であった。貝は重要な外来交換品であるのみならず、人々に慣れてきた交換の媒介物である。それが最初に貨幣になるのは当然のことである」¹¹と述べている。

ここでは、貝の貨幣になる理由として、一は重要な外来交換品、二はその前に交換の媒介物として用いられたこととしている。確かに、内陸の殷の人々にとって、遠い海からもたらされた貝は重要な外来品である。しかし、これだけでは、貨幣になる理由が不十分であるといわざるをえない。重要な外来品はおそらく貝だけではなく、その他のものもあると考えられる。殷代の墓から、亀甲、魚骨、玉なども発見された。これらも、重要な外来品であろう。二番目の理由がよく分からないが、前に交換媒介物として用いられた根拠はどこにあるかを明らかにしていないし、その時の貝は何故貨幣ではないか。おそらく、共同体に対して、貝は「重要な外来交換品」であって、共同体間において、「交換の媒介物」であったと理解してよいと思われる。しかし、朱氏において、共同体内と共同体間とを分けて考察する視点を有していないようである。

「殷代社会の基本的状況」を説明して、氏は、「次に、われわれは殷時代の文献からこのこと(貝が貨幣になること―筆者)を考察できる。尚書、甲骨文、金文とも貝に関わる記述がある」と述べている。続いて、尚書、甲骨文、金文の貝に関わる記述を挙げ、貝の貨幣性を説明した。この点について、後で触れたい。

単に文献を挙げただけでは、証拠不足と自覚して、「これらの文献によって、貝の当時の経済的な意味を証明できないならば、われわれは殷時代の遺跡と墓葬の貝の出土状況から考察できる」とし、殷墟からの貝の出土の数量や置かれた位置などを紹介して、「貝が一種の富であり、あらゆる物品と交換できる貨幣であり、装飾品だけではない」と結論を出した。氏によっては、貝が貨幣あるいは装飾品と二つの役割しかを持っていない。これについて、蕭清氏も同じ見方である。蕭清氏は「実際、貝の貨幣としての役割、あるいは装飾品としての役割がはっきり分けることはできない。貝は貨幣として、富の社会的表現であり、社会的富の結晶である。ところが貨幣としての貝は、自身そのものまず商品であり、独自の使用価値を持ち、装飾品としては、貝の特殊的な、自然の富の存在形態である」¹²と説明してい

5 朱活 前掲論文 34頁

6 同上

7 同上

8 同上

9 同上 35頁

10 同上

11 同上

12 蕭清『中国古代貨幣史』35～36頁

る。しかし、王毓鈴氏は、次のように認識している。「当然、われわれは殷時代において、貝は貨幣として用いられる以外にほかの用途がないとは言えない。殷時代において、貝が装飾品と呪物として使われていた。…貝の宝飾性と神秘性からこそ、貝が一般的に欲求され、交換の媒介物になった」¹³。

以上のように、朱活氏は「貝は殷時代の重要な貨幣である」と結論し、続いて、周時代になると、「商業が次第に発展して」、「西周金文には、賜貝、賞貝、賓貝の記述が少なくない」し、「周時代の墓から常に天然貝が出土している」ことによって、貝は「当時の重要な貨幣の一つ、かつ殷後期に比べ、一層発展してきた」としている¹⁴。

王毓鈴氏は、『中国古代貨幣の起源と発展』第2章「我国最早的貨幣——貝」において、まず、朱活氏と同じように、貨幣発生の理論を分析した。貨幣発生の理論について、王氏の本の注①によって、説明されている。「以上の貨幣発生の理論についての分析は、『資本論』第1巻第2章『交換』によるものである」¹⁵。その後、氏は墓中から発掘された貝の存在と『尚書』・甲骨文・金文に貝に関わる記述があることによって、貝が殷周時代において貨幣として用いられたと結論づけている。

蕭清氏は、「単に古文獻、甲骨文、金文あるいは天然貝の形や数からだけ判断して、当時の社会の発展段階、経済発展と交換の状況を無視するならば、貨幣の起源がうまく解明できないし、貨幣発生の時期も判明できない」¹⁶と、王氏のような議論を批判し、朱活氏のように、当時の社会経済および交換の状況を詳しく考察している。「氏族社会時期の物々交換（部落間、家庭間、及び各生産者個人間の交換を含む——蕭清）は、偶然的拡大された価値形態のみを有して、貨幣ではない」とし、「殷代になって、手工業と農業との分業がすでに長い歴史を持っている。これに関連して、夏・殷時代、とくに殷代では、交換の範囲も拡大された。…有名な殷墟周囲の墓葬の中に、常に貝だけが発見されたのではなく、大量の亀甲、海蚌、鯨や鯔の骨、玉石なども発見された。これらはあるものが東海や南海で産出され、あるものが新疆で産出され、あるものが東北から来た。いずれにしても、交換あるいは貢納によって遠いところからもたらされてきた。…それゆえ、第三次社会的分業、すなわち商業の出現もすでに顕著になった。…このような事実と状況によって、また甲骨文と殷代金文に『囚貝』『取貝』『賜貝』『賞貝』の記述があることと、『尚書』の中に貝玉を欲求し、貝を『貨宝』と意識する記述が存在することと関連して、われわれは貝が既に貨幣であることを判断でき

る」¹⁸と結論を出している。ここで、蕭清氏は、「氏族社会時期の物々交換」と「偶然的拡大された価値形態」を同一視して、マルクスの価値形態論に対する理解が不十分のみならず、「部落間、家庭間、及び各生産者個人間の交換を含む」という註釈によって、氏は共同体間の交換（部落間）と共同体内の交換（家庭間、各生産者個人間の交換）かならずしも明確していないと思われる。例えば、さきに引用された蕭清氏の文章、「殷代になって、手工業と農業との分業がすでに長い歴史を持っている」とは共同体社会内の状況であると思われるが、「これらはあるものが東海や南海で産出され、あるものが新疆で産出され、あるものが東北から来た。いずれにしても、交換あるいは貢納によって遠いところからもたらされてきた」とは、共同体間の関係であって、「第三次社会的分業、すなわち商業の出現もすでに顕著になった」は再び共同体内のことである。このように共同体内と共同体間とを区別しない取り扱い方は朱活氏の仕方と同じである。共同体内の役割分担と共同体間の交換とは直接に関係ないのではないかと思われる。

上記諸説の論者6人のうち、貨幣とは何かについて明確に定義したのは山田氏だけである。氏は、「経済学という価値尺度（計算手段あるいは計数手段—山田）、支払手段、価値蓄蔵の機能を有する一般的等価物」としている。ところが、価値尺度、支払手段、価値蓄蔵の機能について、「経済学」においてさまざまな学説で説明されているし、とくに「一般的等価物」とは何かについて「（貨幣）発生段階では単純な定義はしにくい」という理由で説明されていない。しかし、こういう文章、「マックス・ウェーバーは貨幣について欽定的な支払手段（専制君主の支払手段—山田）と一般的交換手段（一般的等価物に同じ—山田）の二種類をあげている」によって「一般的等価物」と「一般的交換手段」とを同じように取り扱っていることがわかる。ところが、「古代中国では、実用性のあるものではなく、高い次元の神聖性を付与されていた子安貝こそが中国最初の物品貨幣（価値尺度となる品で貨幣的機能を有するもの—山田）となった」と述べている。ここで氏は、子安貝を「中国最初の物品貨幣」とするが、貨幣を「価値尺度となる品で貨幣的機能を有するもの」と註釈して、価値尺度すなわち「計算手段あるいは計数手段」のみを認め、貝の「一般的等価物」=「一般的交換手段」機能を否定している。また、貝に関して、「その形状から豊産の霊力をもつものとして珍重されてきた」とし、または「豊産を祈願し、死者の再生・安寧を祈念するもの、また祭祀の供物、あるいは宝飾などに不可欠なものとして宝物視され」としている¹⁹。

13 王毓鈴『中国古代貨幣の起源と発展』 20～21頁

14 朱活 前掲論文 37頁

15 王毓鈴 前掲書 15頁

16 蕭清 前掲書 32頁

17 蕭清 前掲書 33頁

18 同上 34頁

関野雄氏は、「中国の古代貨幣」の「一 貝貨の用途」において、次のように述べている。「殷時代になると、(貝が)墓のなかから多数出土する。殷周時代の金文に王侯が臣下に貝を賞賜した『賜貝』の事実がしばしばみえるのによって、はるかに南海からもたらされた貝は、一種の財宝として珍重されていたにちがいない」。さらに、「おそらく貝は、単に財宝として取り扱われたばかりでなく、携帯・勘定・保存などに便利なところから、中国における最初の貨幣として流通したのであろう」としているが、最後のところに、「貝は貨幣としてより、むしろそれ以上に、呪術や装飾のために使われた」と結論している²⁰。貨幣——交換の媒介物(氏の論文によって、推察できる)の機能が完全に否定されていないが、それが第二位に置かれた。

濱田耕作氏の論文「支那古代の貝貨について」の核心は次の通りである。

「支那に於ける金属貨幣使用以前に、果たして貝貨の行はれたるか否か等の問題に就きて、多少の考察を試みんと欲す、想ふに刀布等の金属貨泉が周末より春秋戦国の間に発生し流行したることは、殆ど疑ふ可からざる事実とす可く、其の以前に於いて物品交易の風行はれたると同時に、或種の物品が交易の媒介物として貨幣の用をなしたることも亦た推察に餘あることなる可く、貝が少くとも他の媒介品と同時に貨幣の用をなしたることを推測せしむるものは、支那文字学上の智識と、人類学土俗学上の例証の両者を以て其の最も有力なるものとす可し、許慎の説文の貝字の注に『古者貨貝而寶龜、周而有泉、至秦廢貝行錢』と云へるが、是れ蓋し一方に詩經等の古典に早く貝を重用するの記事あると共に、貨字寶字が貝に従ひ、其他売買資財等経済的の事物を現はす文字が貝字に従ふこと、他方に於いては許慎の当時には貝を貨とするの伝説ありしを以て立説せられたるなる可し、吾人は貝が古代支那人間に珍重せられたる各種の記事と、其の保蔵蓄積に最も適当なる性質を具有する点より見て、此の貝貨説の決して不穩当なるを見ざるのみならず、後段述ぶるが如き諸民族間に於ける類似の事実と之を参照するに於いては、愈々其の妥当の見解たるを認めずんばあらざるなり²¹」。

ここでは、濱田氏の「其の以前に於いて物品交易の風」に疑問をもっている。「其の以前」とは殷周時代あるいはまた前の時代と考えられる。共同体的社会において、生産力の低さと固定身分制の制限によって、「物品交易の風」が有りえないのではないか。「支那文字学上の智識」において、現代中国語の「経済的の事物を現はす文字が貝字に従ふこ

と」は事実であるが、貝の盛んに使われた殷周時代の甲骨文には貝に従う文字があるが、経済的意味をもっているのがみつからなかった(付表1)。許慎の『説文』は後漢(紀元100年)に完成したものと見られ、殷周時代から千年ほど後のことである。その時の中国には、銅鑄貨幣が流通しており、貨幣経済がすでに確立されている。「銅」は古語の中では「金」と呼ばれる場合が多い、「金」と「貝」を共用するときがある。例えば、「錫—賜」、「鑄—賻」等々。現在、中国の財宝にまつわる漢字には、「貝」に従うものが多いことは、このように発生してきたのではなからうかと考えられる。また「諸民族間に於ける類似の事実」は、なぜ「妥当の見解」となるのか。

二 古代中国における貝貨成立の可能性

ある特定の商品が一般的等価物として商品世界から排除され、貨幣として機能するというマルクス価値形態論の論理の背後には、消費の対象とならない余剰の存在が前提されている。これについて、宇野弘蔵氏は、「種々なる使用価値を有する商品によって、自己の所有する商品の価値を表現するという拡大された価値形態において、それぞれの商品の所有者によって共通的に等価形態におかれる商品は、逆説的に聞こえるかもしれないが、むしろ日常生活に直接必要のない商品、あるいは直ちに消費せられるものではないというような商品となる傾向を有するものといえるであろう。——商品の発生自身がすでにそういう性格を持っているとも考えられる。生活に絶対的にかくべからざるものが先ず商品となるというのでは、商品の出現以前の生活を考えることはできない。少なくともかかるものでは余剰物としてかくべからざるものでなくなるという関係にあることにならなければならない²²」と述べている。ここでは商品発生自身が余剰物を前提しなければならないし、「一般的等価物」としての商品も「日常生活に直接必要のない商品、あるいは直ちに消費せられるものではないというような商品となる傾向を有するもの」としている。殷周時代の中国において、農業の余剰物がすでに発生しており、商品に転化する可能性をもっているし、貝殻というものも「日常生活に直接必要のない商品」かつ「重要な外來交換品」であって、「一般的等価物」になる可能性が十分有りうると思われる。

1 余剰農産物の出現

殷時代の政治経済の中心——殷墟から数多くの青銅製祭

19 山田勝芳 『貨幣の中国古代史』 9～18頁

20 関野雄 「中国の古代貨幣」『古代史講座』9所収 349頁～350頁

21 濱田耕作 「支那古代の貝幣について」『説林』第2巻所収 268頁

22 宇野弘蔵 『経済原論』上巻 34～35頁

器、兵器が出土されて、この時代は「青銅文化の栄えた時期」と言われるが、出土している数えられないほどの青銅器のうち、青銅農具はわずか千分の一、二ぐらいの割合にとどまっている²⁴。これに反して石製農具の石刀（石鎌）は数千個出土している。また、中国科学院考古研究所は、西周の豊・鎬の二京および洛陽の周王城等西周人の重要な活動地域で、相当大規模な考古発掘（前の地区で、一万平方メートル以上、後の地区でも三千余平方メートル）を実行したが、一片の鉄の出土も無く、また主要な青銅製農具も見られず、出土した主要な農具と手工業具は、みな石器・骨器・蚌器であった²⁵。これによって当時の農業は依然として木器、石器と骨器、蚌器使用の段階にあったといえるであろう²⁶。

殷周時代の人々は耒・耜（木製のスキ）および石刀、石包丁のような粗製の石器、木器を使っていたにもかかわらず、その居住地が黄河下流の次生黄土地帯なので、高い生産力を発揮していた。「黄味がかった灰色の粉状微砂質の土壌は、木耕農業にも適し、黄土粒子の均整・多孔質の土性からして、高い含水・保蓄力を有するとともに、垂直に配列された柱形紋理は、活発な毛細管現象を呈して、土壌水分を蒸発させる。もし雨量が十分にあり、しかも作物の生育期を通じて適当に配分されれば、この土壌は豊かな収穫をあげる²⁷」。殷時代の醸酒業の発達は余剰農産物の出現の証左である。生存のための食糧が足りなければ、食糧で楽しむため醸酒することは考えられない。卜辞に酒に関する記載が多いし、また出土した青銅器の中にも酒器が70～80%を占めている²⁸。また、壮麗な宮室を築き、宏大な陵墓を営み、各種の素晴らし工芸品を作り、大規模な遠征隊を繰り出すということ、それ自体はいずれも余剰農産物の存在を語っている。宇野氏によると、最初の商品になるものは余剰物である。これらの余剰物は「交換以前には商品ではなく、交換によってはじめて商品になる²⁹」。「ある使用対象が可能性から見て交換価値であるという最初のあり方は、非使用価値としての、その所持者の直接欲望を越える量の使用価値としての、その定在である³⁰」というマルクスの論理によっても、余剰物すなわち「所持者の直接欲望を越える量の使用価値」が、ある使用対象の交換価値の

最初のあり方である。原始社会の場合、最初の余剰物が共同体に所属するものであって、「商品交換は、共同体の果るところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、はじまる³¹」。また「貨幣結晶は、…交換過程の、必然的な産物である³²」ことによって、余剰物→商品→貨幣という関連の成立を想定することができるであろう。貨幣の発生はまず余剰物の発生から始まるといえる。

2 手工業製品の増加

殷周時代には、手工業が重要な生産部門に発展しつつあった。当時主な手工業には青銅器の鑄造、玉器の製作、製陶業、絹・麻紡織業などが挙げられる。殷墟の発掘によって、青銅器鑄造、製陶、玉・石・骨の製造場が多数発見されたのである。

殷代の青銅器鑄造の技術がきわめて高い水準に達していた。河南安陽小屯の武官村の殷墓から出土した司母戊大方鼎は殷代青銅器のうち、第一に挙げられる重器である。方鼎の高さ104センチ（把手を含めると137センチ）、長さ106センチ（把手を含めると110センチ）、幅71センチ（把手を含めると77センチ）、重さ875キログラムに達し、この青銅器は殷代における鑄造業の技術水準や生産能力をよく表わしている。

西周時代において周王や各邦の諸邦たちはそれぞれ自己の銅器工場をもったので、その製造地は一段と拡がり、また数量も増加している。1990年河南三門共峽上村嶺で発掘された四つの西周晩期の墓葬と一つの車馬坑のうち青銅器だけで2,400件あまりを出土した³³。殷周時代の手工業製品が青銅器のみならず、陶器や玉器などの分野でも極めて高い技術水準に到達していたと言われている。

共同体内の手工業製品の数量と種類の増加につれ、より多くのものを交換に投じられる可能性がある。「この形態（拡大された価値形態——筆者）の必然性は交換過程にはいつてくる商品の数と多様性とが増大するにつれて発展する³⁴」。つまり、拡大された価値形態から「一般的価値形態」に発展して、そこから「一般的等価物」としての貨幣が生まれてくるのである。

23 中国社会科学院考古研究所編 閔野 雄監訳 『新中国の考古学』 313頁

24 杜建民 「青銅器是否商周时期生产力发展水平的标志」 『先秦・秦漢史』1993年10期

25 中国科学院考古研究所編 『新中国的考古収獲』 52～53頁

26 閔野 雄 「殷王朝の生産的基盤」 『中国考古学研究』所収 79～130頁参照

27 天野 元之助 『中国社会経済史』 以下ではこの本を前掲書と表示する 40頁

28 李亜農 『李亜農史論集』 460頁

29 マルクス 『資本論』 国民文庫版① 160頁

30 同上

31 同上 161頁

32 同上 160頁

33 姚政 「論西周的貨幣」 『先秦・秦漢史』1994年4期

34 マルクス 『資本論』 国民文庫版① 162頁

3 共同体間の交換の存在

中国の古代の文献『易経』の中には、「日中、市を為して天下の民を致し（まねき）天下の貨を集め、交易して退き、各々其の所を得しむ（欲しいものを入手させる）」とある。これは氏族共同体間の交換を語っている。

殷王朝の領域は、概ね黄河の中下流域であった。殷と同時に、諸方国（殷以外の部落・外敵）の存在が確認できる。例えば、北西には土方、鬼方などがあり、江淮流域に虎方、夷方がある。郭沫若編『中国史稿』によると、16の国の存在が確認できる。この多くの国の中で生産物の相互交換が想定できるであろう。実際の考古学的資料によっても、明らかされた。河南偃師二里头遺跡は殷代初期の遺跡と認められ、その中から、海貝のほか、緑松石製品、玉器などが発見され³⁵、いずれも交換か貢納によって得られる外来品である。また前述したように、有名な殷墟周囲の墓葬の中に、貝だけではなく、大量の亀甲、海蚌、鯨や鯳の骨、玉石なども発見された。東海・南海また北西に産出される物は、交換か貢納によって得られたと考えられる。

一方、殷の領域以外の地域で、殷の遺物が発見された。例えば、安徽嘉山では殷の青銅器が出土しており、江西で殷の遺物も発見された³⁷。どんな形でそこに持って行かれたかは明らかにされていないが、一応交換の可能性があると考えられる。

余剰農産物の発生と手工業製品の増加によって、殷王朝に所属する各氏族間の交易も行われると推測できるであろう。周時代になると、諸侯の直接・間接の消費に供する以外の余剰生産物は、交易市場を意味する市（いち）で、交易することができた。

交易の品物について、『礼記』王制には、「圭璧金璋有るも市に粥らず、命服命車市に粥らず、宗廟の器市に粥らず、犠牲市に粥らず、戎器市にも粥らず、用器度に中らざれば市に粥らず、兵車度に中らざれば市に粥らず、布帛の精麤数に中らざれば市に粥らず、幅の広狭量に中らざれば市に粥らず、姦色の正色を乱すは市に粥らず、錦文珠玉成器市に粥らず、衣服飲食市に粥らず、五穀時ならず、果実未だ熟せず、市に粥らず、木伐に中らざるは市に粥らず、禽獸魚鼈、殺に中らざるは市に粥らず」（市に粥らせないものとして圭璧金璋、命服命車、宗廟の器、用牲、戎器、日用の器、兵車の度にあたらないもの、布帛の精麤数にあたらざる幅の広狭量にあたらぬもの、不正の色の正色を乱すもの、錦文・珠玉・

成器（美しい器）、衣服・飲食、五穀の時ならず、果実の未だ熟さないもの、木の伐るにあたらぬもの、禽獸魚鼈を殺すにあたらぬものを例示している）とあって、交易の品物は貴重品また贅沢品であり、生活の必需品ではなく、きわめて制限されていたが、交易の存在は否定されないものである。

このように、交換の広がりや深まりによって、交換の媒介物としての貨幣の登場が想定される。貝は殷の領域の産物ではなく、遠く海からもたらされてきたもので、装飾品だけではなく、後述するように生命・繁殖を象徴するものとして、また人間と神々との紐帯を表現するものとして、特殊な商品であり、「域内生産物の交換価値の実際上の自然発生的な現象形態」³⁸である。それゆえ、貝が商品交換の「一般的等価物」として、貨幣形態を取る可能性は十分であると判断できる。

三 氏族共同体内における貝貨の交換手段の不用

共同体内の役割分担と独立商品生産者との区別について、マルクスは、「古代インドの共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物が商品になるということはない。…ただ、独立に行われていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである」³⁹と述べている。つまり、共同体内において社会分業が行われていても、そこでの生産物はただ共同体的生活の維持に充てられるだけであって、商品になることはない。したがって共同体内において、生産物の交換はなく、交換手段としての貨幣の発生がありえないのである。

1 「協田」と「耦耕」

原始の木器、石器の農具に応じて、殷周時代の農業経営は「集団的な農業活動などに服したもの」⁴⁰である。農作業の様式は殷時代には「協田」、周時代には「耦耕」といわれるものであった。「協田者、言衆人通力合作、以事田畝」⁴¹（協田とは衆人の力をあわせて、田畝に従事することである）。「耦耕」とは、当時は家族経営あるいは後世のような零細経営でなく、農場は比較的大きく、多数の労働力を結合する耕作方法である。耦耕の規模は「令鼎」の金文「十千これ耦す」⁴²によると、一万にも達していたという。

35 郭沫若編『中国史稿』第一冊 163～167頁

36 「河南偃師二里头遺跡発掘簡報」『考古』1965・5

37 郭沫若 前掲書 168頁

38 マルクス『資本論』国民文庫版① 162頁

39 マルクス『資本論』国民文庫版① 84頁

40 天野 前掲書 79頁

41 董作賓『殷歷譜』下編卷四 6頁

生産工具の粗末さと生産力の低さのため、労働者たちはまだ個々の独立の生産能力をもてず、共同耕作的な農耕に従事していた。卜辞の中に「王往、以衆黍于墾」がある。これについて天野氏は、「莊重な王の主催する共同耕作の儀式をしるしたものようである」⁴³と指摘し、白川氏も、「氏族共耕というべきものであろう」⁴⁴としている。殷墟のある方窖から発見された総計444個の石刀には、一度使用したのを回収したもののがかなり含まれていた。⁴⁵このことは集団的な共同作業の証左になるであろう。

2 独立的な商品生産者の不在

朱活・蕭清氏に指摘されたように、確かに殷周時代に青銅器のみならず、陶器、玉器などの製造技術も高い水準になっていた。しかし、各共同体内において、当時の社会分業は相変わらず未発達の状態にあるといわざるをえない。これは当時の手工業者の社会地位と固定身分制から判断される。

殷周時代の手工業に携わるのは「百工」と呼ばれたものであった。「癸未卜、有禍百工」（癸未の卜い、百工に災難があるか）という卜辞がある。これは甲骨卜辞のなかで唯一の殷代の「百工」に関する記録である。百工は殷王室に献上される多くの精巧な手工業品の製造者であり、彼等に災難があるか否かはすでに殷王の関心事でもあったのだろう。しかしこの「百工たちは社会地位も低く、人身の自由もなく、実際には官府に駆使されている手工業奴隷」⁴⁶であった。これに対して、「殷代、多数の専門的な職業氏族が存在し、手工業の生産を担当した。…技術を要する部門は、宗氏、分族などの担当するところであったが、単に労働力を必要とする部門は、類醜の担当するところであった。…職業氏族は、それぞれの技術をもって殷王室に仕えたが、氏族の中、宗氏の身分はかなり高かった」⁴⁷と佐藤氏は指摘している。この場合、宗氏・分族が「類醜」⁴⁸を支配統制する関係にあれば、類醜は手工業奴隷とも言えるであろう。いずれにしても、殷代の手工業者が王室の管理の下にあって、独立的な生産者ではないことは間違いないであろう。

百工の地位の窺える西周の金文を二つ挙げる。西周中期器『師毀簋』の銘文：併せて我が西隔東隔の僕馭、百工、牧、臣妾を司め、内外を董裁せしむ。⁴⁹

西周後期器「伊簋」の銘文：王、令尹封を呼びて伊に冊命し、併せて康宮の王臣妾、百工を官司せしむ。⁵⁰

ここで、百工は臣、妾と並べて記されている。臣とは男の奴隷、妾とは女の奴隷である。百工の卑賤な地位が窺える。これについて中江氏は、「百工は器物の製作者なりとするも、生産上における一切の創意は何等賦与されていない。蓋し彼等の地位は生産人に非ずして生産具たるに過ぎないからである。故に実際の生産人即ち自己の需望を満足せしむるため、工人に命じて器物を生産せしむる王又は其以下の君主に意志の変更なき限り、工人の意志に創意を認むる如きはあり得可からざる次第である」⁵¹としている。マルクスの言葉「互いに他人であるという関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては存在しない」⁵²が妥当する状況であったと言えよう。

一方、西周時代において、固定身分制が実施されていた。固定的身分制とは、周代社会において、人の出生によってその身分と職業が決定される。『国語』齊語によって「農之子恒為農」（農民の子は永遠に農業を行う）、「工之子恒為工」（手工業者の子は永遠に手工業を行う）、「商之子恒為商」（商人の子は永遠に商業を行う）というように、その身分と職業を世襲させ、職業選択の自由がなかったということである。

非独立の手工業者の地位と固定身分制によって、手工業生産は農業共同体の有機的生産体系の一部として存在し、そこから分離して独立の産業になるまでに至っていない。手工業製品は交換のためではなく、共同体的経済生活を維持するために生産されるものである。もちろん、余剰物として共同体間の交換に投じられる可能性はある。

3 商人の役割

当時の商人と呼ばれる人々の地位と役割については、『周禮』には、「府に属する賈人は庖人に隸属する賈8人、大府における16人、王府における8人、馬質に隸属する賈4人、羊人に隸属する賈2人、犬人に隸属する賈4人」としている。中江氏によって商人（賈人）は「下級官吏——ギリシアローマにて奴隷が当りしと類似せる性質の——たる」⁵³ものと説明している。

商人の役割は「主市賈、知物賈」（市の状況の調査と交易）

42 白川 『白川静著作集』5 金文と経典 134頁

43 天野 前掲書 76頁

44 白川 『白川静著作集』4 甲骨文と殷史 163頁

45 北京大学歴史系編『商周考古』 35頁

46 杜勇 「論先秦時期官工賈的社会身分」 『先秦・秦漢史』1992年3期

47 佐藤 武敏 『中国古代工業史の研究』 20頁

48 類醜は、中江丑吉氏によって、諸氏族のうち、祭政の関與から脱却した氏族成員と解された（『中国古代政治思想』206頁）。

49 白川 『金文通釈』巻三下 749頁

50 白川 『金文通釈』巻三下 523頁

51 中江丑吉 『中国古代政治思想』 77～78頁

52 マルクス 『資本論』 国民文庫版① 161頁

であった。例えば、「馬質」に隷属する商人は馬の種類や物色およびその取引の状況などを調査し、必要とする時、市に行き行って交易する人であった。⁵⁴

このように「氏族集団の段階においては、農民、手工業者との分離がカストの形態で実現しているとしても、農業と手工業は共同体内で一体化されて共同体的な共同経済を実現していて、両者の間に介在して営利を目的とする商業・商人が出現し、発展する条件は乏しいと言わなければならない⁵⁵」と影山剛氏は指摘している。各氏族間の交易に従事した商人は手工業者と同じく、非独立的であり、共同体内の役割分担の相違にすぎないものである。後世のような営利の目的としての商人と本質的に異なるものであった。

以上検討したように、当時の氏族共同体内の経済状況は、中江丑吉氏に「独立室家経済」と呼ばれるものであった。「その特質とする所は自給自足であり、無交換たるにある。宮室、衣服、食物、器具、装飾品、凡て自己の駆使する農民、工民、商民等の生産し運來したるものである。彼等は自己の配下にある商人をして他の邑土に於いて交換経済を営ましむるが、其目的は生活の維持でなく、此が享樂に過ぎない⁵⁶」と説明されている。

要するに、氏族共同体内においては、自己生産・自己消費の自然経済が基本である。農業と手工業は共同体内で一体化されて共同体的な共同経済を実現しており、農民、手工業者、商人はそれぞれ共同体の役割を分担し、独立な生産者になっていない。このような非商品経済の下では、交換手段としての貨幣が必要とされないと考えられる。

四 古代中国における貝貨の特質

以上の分析によって次のことが判明する。中国古代の貝貨が、共同体間において、一般的交換手段として用いられる可能性をもっているが、共同体内では、商品交換のない自然経済であって、交換手段として機能しなかった。また、商品といい、貨幣といい、未開の社会において、人々は貨幣を「富の社会的表現」や「社会の富の結晶」（蕭清）と認識するまでに至っていないであろう。西周時代の作品と見られる『詩経』には「富人」を言及した⁵⁷。富人は旨酒、美味しいもの、家、食糧などを持っている人である。それゆえ、現代人の持っている商品・貨幣の観念を以って、古代人の貨幣観を理解しようとすれば、原始貨幣の謎を解明できないと思われる。殷周時代の墓中の貝は単に「一種の財

富、あらゆる物品と交換できる貨幣」（朱活）という表現によっては、その特質を説明され得ないのであって、貝の持っていた特殊性に解明の鍵が求めなければならない。

1 墓葬に見る貝貨の特質

殷周時代の墓葬から出土している大量の貝を考古学的資料として、当時の貝の持つ特殊性を分析する。

附表2「殷周時代の貝の出土数量と置かれた状況」によると、殷周時代において、貝は中原地域（河南・山西）を中心として、北東の遼寧、北西の新疆、東の山東、南の江蘇に至るまで、非常に広範囲において用いられていた。また出土している貝の数は表に挙げられたものだけで20,640である。これは個数および保存場所が確認されたものに限定された貝の最も多い殷墟婦好墓では、6,880余の貝が出土された。この数多の貝は単に装飾品だけで、解明されえず、貝の特殊性を求めなければならない。

貝の墓中に置かれた状況から見て、以下の四種類に分けられる。①人骨の頭・胸・腰・脚のあたり、②手中・口中、③祭祀坑、④殉葬としての人・馬・犬などのあたり。貝の特殊性についての分析はその置かれた位置から始められる。それぞれの位置はそれぞれの意味を持っていたのである。

貝が美しい光沢を帯び、内陸に住む古代中国の人々にとってはあまりにも珍しいものであり、最初に装飾品として使われていたのにちがいないであろう。中国古代の貝は一般に「朋」を以って数えられた。この字は殷の甲骨文字でも、西周の金文でも、「𠄎」のように紐に通された貝の象形として表わされている。最初の貝が装飾品として扱われた証左である。古墓において、人骨の頭・胸・腰・脚のあたりから発見されたものは、輪に連ねて飾りとしたり、衣服に綴ったりしたのであろう。

出土された貝の置かれた状況によると、もっと重要なのは、貝が生命およびその繁殖の象徴として呪術的な意味を持っていた。これは死者の口中、手中の貝である。人の口に含ませたり、手に握らせたりしたのは、貝のもつ神秘的な生命力によって、死者の復活を願ったのであろう。この「神秘的な生命力」がどこから生じたのかについては、有力の学説として古代の生殖器崇拜説がある。「その形が女性の生殖器に似ていることから、母系社会で尊ばれ、かつ伝統的なならわしとして、長く引継がれてきた⁵⁸」という説である。これを重要な位置に置きたいので、少し詳しく説明

53 中江 前掲書 78頁

54 曲英杰 「工商食官辨析」参照 『先秦・秦漢史』1985年10期

55 影山 剛 『中国古代の商工業と専売制』 2頁

56 中江 前掲書 85頁

57 本文：「彼有旨酒、又有嘉穀。洽比其鄰、婚姻孔云。念我獨兮、憂心殷殷。侃々彼有屋、蕝々旃穀。民今之無祿、天々は椽。嗚矣富人、哀此惇獨」。

する。

生殖器崇拜について、百年ほど前の書物『性の崇拜』の中に、「生殖器崇拜は、或特別なる人種又は或特別なる時代に限り行われるにあらずして、地球上のあらゆる古代人民に行われた崇拜である。即ち人類が一般に生及び生殖の大神秘を見て驚嘆し、其結果自然に対して行った崇拜である」⁵⁹と述べられている。「貝」に関して、「ヨニ（女性生殖器）に於いても、自然の物体中其形状の類似するが為に、其表象とせられたものが多い。この種の最も普通にして、人の能く知るものは貝である」⁶⁰としている。

趙国華氏は「生殖崇拜文化略論」において、中国古代に、女性生殖器に似ている魚、蛙、花などの崇拜の存在を考証したうえで、次のように述べている。

「生殖崇拜の現象は表面性がある、その深い含義は人類自身の生産問題である。すなわち人口問題である。原始民が社会生産力としての人の再生産の問題に深く関心を持ち、生殖崇拜の発生に直接つながった。我々が知っているように、人類社会の人口生産には三種類がある。原始的人口生産と伝統的人口生産と現代的人口生産の三つである。原始的人口生産の特徴は高い出生率と高い死亡率と極めて低い増加率である。考古学者の推測によるとその時の死亡率は50%にも達していた。これに伴ったのは原始民の平均寿命の低下であった。研究によるとネアンデルタール人の平均寿命は20歳に満たず、北京原人の成人も30歳を超えるものはなかった。原始民は出生率の増加によって人類自身の再生産の拡大を求められなかったと想像できる。寿命の低さで、女性の生育期間が現代人より大いに短いという要因も考えたら、生産率の増加に頼って人類自身の再生産の拡大を求めるとの意義は尋常ではない。だから、人口問題は原始社会生活において人類社会の継続ができるかどうかの根本的な大事であった」⁶¹。

このような社会において、「生の門」と呼ばれる女性の生殖器がいかに神聖なものと考えられたかは想像に難くない。それを表わす形としてのいろいろなものが崇拜の対象となった。⁶²貝はその一例であってと考えられる。このように、女性の生殖器のもつ繁殖・生命力がその形に似ている貝に移り、貝のもつ神秘的性格はここから生み出された。これは王毓銓氏の「神秘性」説と山田氏の「豊産の霊力」説及び関野氏の「神秘的な生命力」説の源泉であろう。こ

の神秘性に貝の稀少性が加わって、宝物視されるに至ったと考えられる。

さらに、祭祀坑あるいは銅頭像中からも貝が発見されている。祭祀は当時社会において、一番大事な事項である。

「羅振玉が卜辞1169について調査した結果によれば、祭祀に関するものが最も多く、538片を占め、次いで漁獵に関するものが197片の多さに及んでいる」⁶³という資料が、祭祀の重要性を明らかにしている。甲骨卜辞は、祭祀・征伐・天象・畋遊・祈年などなどについての吉凶を卜問したものである。また、出土された青銅器はほとんど祭祀用品で、実用品がないことも祭祀の重要性を語っている。祭祀は人々と神々あるいは祖先とのコミュニケーションの手段であって、その際、供物としての貝は人間と神との紐帯になって、一層神秘化されてきた。それゆえ、貝が多くの人々に求められ、やがて貝をもつことは、一種の権力・地位の象徴となった。殷周時代の墓葬から殉死者や殉葬犬など、あるいはおもがいとして、貝が使用されているのはしばしば発見される。例えば、殉死者の貝について、「1958～1959年殷墟発掘簡報」によれば、発掘された54体の殉死者のうち、貝を緊いで輪にした飾りとバラの貝を伴っているものが7体、貝と玉を伴っているものが2体あった。殉死者だけではなく、殉葬犬にも貝が使われた。⁶⁴また、車馬・器物などの飾りとして、貝が使用されていた(附表2参照)。これらの資料によって、奴隸・馬・犬などに貝が用いられ、当時の社会において、貝はあまり珍しいものではなく、普通の装飾品にすぎなかったという説がある。⁶⁵しかし、これは、むしろ墓の主人の権力・地位の象徴としての意味が大きいのではないと思われる。

以上、墓中の貝の置かれた状況によって、貝の主な用途を検討した。装飾品としてだけでなく、呪物また祭祀の供物として特別視された結果、貝はもともとの装飾品の性格を突破し、より高次のものつまり生命およびその繁殖の象徴として、人間と神との紐帯として、ステイタスシンボルとしての役割をも果すことになった。特に重要なことは、このような性格を持っている貝は当時の社会において、多くの人々に受け入れられ、一般的・社会的機能を持つようになったことである。「1953年安陽大司空村発掘報告」によって、発掘された165基の殷時代の墓には、貝のある墓が83基であった。⁶⁶1個貝の墓が最も多い。また「1969-1977

58 汪慶正 『中国歴代貨幣大系』(『先秦貨幣』)「総論」 10頁

59 クリフォード・ハワード 『性の崇拜』 出口 米吉訳 「緒言」の1頁

60 同上 96～97頁

61 趙国華 「生殖崇拜文化略論」 『先秦・秦漢史』1988年3期

62 『性の崇拜』によると、孔有りの石、魚、無花果などがある。

63 松田寿男 「殷の卜辞と古代支那人の生活」『加藤博士還暦記念東洋史集説』所収 745頁

64 石興邦 「長安普渡村西周墓葬発掘記」 『考古学報』1954・8

65 汪慶正 「十五年以来古代貨幣資料的発見和研究中の若干問題」 『文物』1965・1

66 馬得志ほか 「1953年安陽大司空村発掘報告」 『考古学報』第九冊(1955年)

年殷墟西区墓葬発掘報告」によっても、939基の殷時代の墓のうち300基余の墓から貝が発見された。⁶⁷ 貝が当時の社会において、一般的・社会的な機能をもっていることは明らかである。

2 「貝」に関わる甲骨文と金文とに見る貝貨の特質

殷代史研究における最重要の文字史料としての甲骨文には、貝に関する記述がすでに見える。「庚戌、(卜して)貞ふ。(多)女に賜ふに、貝朋を侑せんか」と「貝二朋を賜はんか」などがある。大切な貝を臣下に賜与してもいいのかと天帝に伺う卜辞であった。甲骨文に比べて、殷周時代の金文(青銅器の銘文)には王侯が臣下を賞賜した「賜貝」の事実がはるかに多い。郭沫若『兩周金文辞大系考釈』に収められた周代青銅器銘文162のうち、21の銘文中に「賜貝」の記載がある。

白川静の『金文通釈』には、西周の青銅器198器のうち、貝に関わるものが36器である。附表3で、器名と貝に関わる部分を取り上げる。

附表3によると、36器の銘文のうちに、賞貝・賜貝あるいはその内容にあたるものが34であった。これらの賞貝・賜貝に関わる金文の内容を見ると、いずれも、王(または王命によって他の者)がある者に貝を賜与し、それを記念して受賜者が父某(また母某、兄某)を祀るための祭器を作ったことを記すものである。賜与される貝の朋数には五朋(趙卣、小臣嬰、鼫毀)、十朋(令簋、小臣單觶、叔德簋、孟卣、旅鼎、史臨彝、庚羸、師遽毀、秉戎卣)、二十朋(德方鼎、晏侯旨鼎)、三十朋(呂方鼎、刺鼎)、五十朋(效尊、敵毀三、小臣静彝)、百朋(墜方鼎)というものがあった。殷時代の賜貝には多くとも二十朋に対して、周時代の賜貝の数が百朋と記録された。天野氏は、賜与の貝数の増加によって、「装飾品としての性質から、次第に貨幣に転化する」⁶⁸としている。

また、賜与されるものは貝だけではなく、多くのものに及んでいる。銘文に出現された数によれば、貝、金(銅)、鬯、馬、弓、矢、臣、田、車、裘、圭、衣、鬲、布、牛などという順序である。⁶⁹ 第一位は実用品の馬や車などではなく、貝であった。このように貝などを所有・支配することによって、王・公の権威が誇られると同時に、「賜与」という形で、一種の社会財富の再分配がはかられたとも言えるであろう。この意味で貝が支払手段機能を発揮していたとも言えるであろう。

賞貝・賜貝のほか、甲骨文には「取貝」が見え、金文に

は「孚貝」(鬻鼎、呂行壺)がある。つまり戦争・武力によって、貝を獲得したという意味である。貝の宝物という性質が明らかされた。また、そのほかに、二つの金文のよって、貝の特殊性がさらに見えてきた。

一つは西周初期器あるいは西周中期器と認められる「遽伯鬯彝」という青銅器の銘文である。その銘文は次の通りである。

「遽伯鬯乍(作)寶彝、用貝十朋又四朋」(遽伯鬯(人名)が寶彝を作るために貝十四朋を用いた)

蕭清氏は、「ここでは、貝は価値尺度であるとともに、流通手段である。両方の統一物として、疑いなく、貝がすでに貨幣である」⁷⁰と解釈している。ところが、同じ青銅器銘文では、西周中後期器「召鼎」の銘文の中に「我既買汝父用匹馬束絲」(五人の奴隸が一匹の馬と一束の生絲と取引された)がある。この二つの銘文を対照して、構造的には同じである。当時の社会経済の状況を考慮すれば、「用」を「取引」と解釈するのが、より正しいのではないかと思われる。つまり、「貝十四朋を以って寶彝を作る銅地金と取引(交換)した」というのは「遽伯鬯彝」銘文の意味であり、貝が媒介物として、銅地金を買うのではなく、貝というものと銅地金というものととの交換、いわゆる物々交換の可能性もある。「遽伯鬯彝=貝十四朋」という式が成立できるようであるが、貝の標準としての機能がまだはっきり見えないのである。これを明確にするために「衛盃」の銘文を挙げなければならない。

「隹三年三月既生霸壬寅、王鬻旂于豊。矩伯庶人取瑾璋于裘衛。才八十朋。厥賁其舍田十田。矩或取赤琥兩・麀率兩・賁賁一。才廿朋。其舍田三田」⁷¹。(これ三年三月既生霸壬寅に、王は旂を豊に鬻られたり。矩伯の庶人が瑾璋を裘衛より取れり。才(=財)は八十朋なり。その賁にそれ田十田を舍せん。矩或赤琥を兩・麀率を兩・賁賁を一取れり。才は廿朋なり。それ田三田を舍せんと。)

銘文の意味：三年三月、王が豊において旂(旗)をかかげる朝会を行う。矩伯の庶人が衛(人名)から貝八十朋に相当する瑾璋を得、それに対して、田十田を衛に舍し、さらに矩伯が衛より一對の赤色の琥と一つの鹿皮製の肩当て(価値貝二十朋)を得た、かわりに三田を舍した。ここでは、貝が標準としての役割を果たしている。つまり、

一つの瑾璋=貝八十朋=田十田

一對の赤色の琥+一つの鹿皮製の肩当て=

貝二十朋=田三田

という式が成立する。強調しなければならないのは、ここ

67 「1969-1977年殷墟西区墓葬発掘報告」 『考古学報』1979・1

68 天野 前掲書 193頁

69 白川 『金文通釈』全六巻収録した青銅器銘文によるもの。

70 蕭清 『中国古代貨幣史』 35頁

71 「陝西省文岐山景董家村西周銅器窖穴発掘簡報」 『文物』1976・5

で貝が交換の媒介物としてではなく、単に価値の参照物だけであった。瑾璋、赤色の琥、鹿皮製の肩当てと田との交易であって、実際に貝が払われることなく、一つの標準として機能していた。

以上、甲骨文と金文との貝に関わる記載から見て、殷・周時代の社会において、貝は支払手段と価値の標準として用いられていたようである。

おわりに

貝貨の盛んに用いられた殷周時代に関わる史的な文献がほとんどなくて、これを解明するために、甲骨文・金文という古文字研究の成果と考古発掘の実物とを結び付け、経済学・社会学などを利用して、総合的に考察しなければならない。

古代中国の貝貨に関して、多くの謎が解かれていない。例えば、その貝がどこから、どういう形態でもたらされたという疑問が残されたままである。ところが、上述したように、殷周時代の墓葬から大量の貝が出土しており、甲骨文や青銅器の銘文には、貝にまつわる記述が多いなどによって、貝はその時代において、特殊性をもつものとして取り扱われていたことは間違えないことである。

また、天然の貝（貨貝）の形を模して、他の材料で作ったものすなわち「仿貝」も古代の墓から多数発現された。仿貝は材料によって、蚌貝、骨貝、角貝、石貝、玉貝、陶貝、漆貝、銅貝の八種類に分類される。このうち貝と並んで貨幣として用いられた可能性があるのは、素材価値を持つ銅貝だけである。これについて、別稿で論じたい。ほかの骨・石などを材料とするさまざまな仿貝は誰でも簡単に作られるから、貨幣にはなりえなくて、本論文の取り扱う対象としなかった。

参考文献

図書

- (日本語)
 クリフォード・ハワード (1922)『性の崇拜』 出口米吉訳 扶桑社
 井村 薫雄 (1950)『中国古代社会経済の研究』 西荻書店
 中江 丑吉 (1951)『中国古代政治思想』 岩波書店
 加藤 繁 (1952)『支那経済史考証』上巻 東洋文庫
 (1991)『中国貨幣史研究』東洋文庫
 関野 雄 (1956)『中国考古学研究』東京大学出版会
 佐藤 武敏 (1962)『中国工業史の研究』吉川弘文館
 (1977)『中国古代絹織物史研究』上 風間書房
 白川 静 (1964)『金文通釈』(全六巻八冊) 白鶴美術館
 (2000)『白川著作集』4甲骨文と殷史 平凡社
 (2000)『白川著作集』5金文と経典 平凡社
 カール・ボランニー (1975)『経済の文明史』 玉野井芳郎・平野健一郎編訳 日本経済新聞社
 曾我部 静雄 (1976)『中国社会経済史の研究』 吉川弘文館

- 貝塚 茂樹 (1977)『貝塚茂樹著作集』第2巻 中央公論社
 天野 元之助 (1979)『中国社会経済史』殷・周之部 開明書院
 (1979)『中国農業史研究』増補版 御茶ノ水書房
 松丸 道雄 (1980)『西周青銅器とその国家』 東京大学出版会
 西嶋 定生 (1981)『中国古代の社会と経済』 東京大学出版会
 影山 剛 (1984)『中国古代の商工業と専売制』 東京大学出版会
 三上 隆三 (1998)『貨幣の誕生』 朝日新聞社
 山田 勝芳 (2000)『貨幣の中国古代史』 朝日選書

(中国語)

- 郭沫若 (1954)『中国古代社会研究』人民出版社
 (1976)『中国史稿』第一冊 人民出版社
 鄭家相 (1958)『中国古代貨幣發展史』 生活・読書・新知三聯書店
 呂振羽 (1962)『殷周時代の中国社会』 生活・読書・新知三聯書店
 李劍農 (1962)『先秦兩漢經濟史稿』中華書局
 李亞農 (1962)『李亞農史論集』 上海人民出版社
 彭信威 (1965)『中国貨幣史』 上海人民出版社
 吳慧 (1983)『中国古代商業史』第一冊 中国商業出版社
 朱活 (1984)『古錢新探』 齊魯書社
 蕭清 (1984)『中国古代貨幣史』 人民出版社
 王毓銘 (1990)『中国古代貨幣的起源和發展』 中国社会科学出版社
 楊寬 (1999)『西周史』台湾商務印書館
 馬飛海總主編『中国歴代貨幣大系』全12巻上海古籍出版社 1989年
 ～(刊行継続中)

雑誌

- (中国語)
 『中国錢幣』 中国錢幣学会 1983年第一期～現在
 『文物』(月刊) 文物編輯委員会 文物出版社 1950年～現在
 『考古』(双月刊) 考古編輯部 科学出版社 1955年～現在
 『考古学報』(季刊) 中国社会科学院考古研究所 科学出版社
 1936～現在

論文

- (日本語)
 関野 雄 「中国の古代貨幣」 『古代史講座』9 古代の商業と工業所収 学生社、1963年
 「先秦貨幣雑考」 『東洋文化研究所紀要』第27冊所収 1962年
 石母田 正 「古代社会と手工業の成立——とくに觀念形態との関連において」 『古代史講座』9 古代の商業と工業所収 学生社、1963年
 大島 利一 「中国古代の手工業」 載『古代史講座』9 古代の商業と工業所収 学生社、1963年
 松田寿男 「殷の卜辞と古代支那人の生活」『加藤博士還暦記念東洋史集説』所収 富山房
 (中国語)
 彭柯、朱岩石 「中国古代所用海貝来源新探」『考古学集刊』第12集 1999年
 杜建民 「青銅器是否商周時期生産力發展水平的標志」 『先秦・秦漢史』1993年10期
 楊善群 「西周農業生産和耕作方法探論」 『先秦・秦漢史』1992年9期
 蔡運章 「西周貨幣購買力淺論」 『中国錢幣』1989年1期
 楊亞長 「从考古資料看西周社会經濟的發展」 『文物研究』1988年3期
 姚政 「論西周的貨幣」 『先秦・秦漢史』1994年4期
 杜勇 「“工商食官” 解體說獻疑」 『先秦・秦漢史』1993年9期
 杜勇 「論先秦時期官工賈的社会身分」 『先秦・秦漢史』1992年3期
 曲英杰 「工商食官辨析」 『先秦・秦漢史』1985年10期

賈谷文 「商品貨幣と殷商奴隸制」 『考古』1976年1期
 程德祺 「殷代奴隸制と商品經濟」 『先秦・秦漢史』1989年8期
 王維国 「説珏册」 載『觀堂集林』卷3
 董作賓 「安陽侯家莊出土之甲骨文字」 載『田野報告』第1冊
 丘光明 「貨幣と度量衡」 載『考古』2001年第5期
 何德亮 「試論大汶口文化時期的商品交換」 『考古與文物』1991年6期
 趙國華 「生殖崇拜文化略論」 『先秦・秦漢史』1988年3期
 衛 斯 「試論貝幣的職能與殷商時期的商品經濟」 『中国社会經濟史研究』1985年1期所収

附表1 貝に従う甲骨文字の意味

	釈	義
敗	(同昌 甲骨文积林)	失敗あるいは災難の意
貞		卜辞の中でよく卜問の意を表わす。卜問の意、卜辞の命辞(卜問の内容)の前に使う。
貝		①地名。②意味不明
貞		意味不明。
貯		①方国名。②人名
賓		①祭名②一期貞人名③子賓, 人名④賓客の名前?
責		①用牲法, 「束」と同じ ②方国名との一説
買		意味不明
貴		①隕とも読む, 隕田は廩田である。②潰とも読む。わなを以って獸を獵する方法。③祭名の一説。④地名
賕		朋と同じ。①宝貨、貴族の賜品。②奉獻の祭品
胸		①人名。②一期貞人名
寶		婦宝、人名
償		「賈」と同じ。
狼		人名
涖		水名の一説
娘		意味不明

出所 徐中舒主編『甲骨文字典』(1612頁)によって、筆者作成

	山西靈石	2	腰坑、肋部	文物86・11
	山西保德	112	車馬器具と並存	文物72・4
	新疆哈密	4	手、頭部	学報89・3
	青海貴德	28	胸腹部	学報87・2
西	甘肅慶陽	37	口中、足の下	考古85・9
	甘肅涇川	7	首、手	文物77・9
	甘肅崇信	19	頭、腰、手	考与文86・1
	寧夏固原	195	腰	考古83・11
	河北磁県	2	口中、腰坑	文物60・1
	陝西銅川	3	墓室の外	考古86・5
	陝西銅川	43	口、頭、腹部	考与文87・2
	陝西鳳翔	95	口、頭、胸部	考与文87・4
	陝西鳳翔	51	口、頭、首部	考与文82・4
	陝西扶風	330余	手の中	文物86・8
周	陝西扶風	5以上	頭部等	文物84・7
	陝西扶風	30	口中、	文博87・4
	陝西澄西	4	口中、首	考古84・9
	陝西澄西	数百	馬飾り	文物86・1
	陝西澄西	1000余	馬飾り、腰	『澄西発掘報告』
	陝西長安	11	口中、腰	考古62・1
	陝西長安	13	頭、足部	学報54・8
	陝西長安	56	腰坑	学報57・1
	陝西淳化	180	棺内	考与文80・2
	河南洛陽	23	口、手、足部	文物81・7
周	河南洛陽	12	頭部の近く	考古72・2
	河南洛陽	3	頭の前、腰坑	考古56・1
	河南浚県	3472	人骨の横	『浚県辛村』
	山東濟陽	77	足部	文物81・9
	山東濟陽	1	棺内	文物85・12
	山東曲阜	50	頭部	『曲阜魯国故城』
	江蘇新沂		遺跡中	考古60・7

注) 所用資料は考古に関連する雑誌や本(一番右の列)の貝の数量あるいは置かれた場所不明のものを除いているものである(1990年まで)。

附表2 殷周時代「貝」の出土数量と置かれた状況

殷	地点	数量	置かれた状況	資料出所
	遼寧北票	10	串状	考古76・3
	河南安陽	1	口中	考古86・12
	河南安陽	234	口中、手の中、脚の下、胸	学報55・9
	河南安陽	2459	棺内一箇所、口中、脚の下、手の中	学報79・1
	河南安陽	4	口中	学報81・4
	河南安陽	21	腰坑	学報87・1
	河南殷墟	603	口、手、足	『殷墟発掘報告1958~1961』
	河南殷墟	718	祭祀坑内	『殷墟発掘報告1958~1961』
	河南殷墟	6880余	棺内西側	『殷墟婦好墓』
	河北藁城	55	口中、腰	『藁城台西商代遺址』
	山東益都	3790	棺中	文物72・8
	四川廣漢	数百	銅頭像中	文物87・10

附表3 貝に関わる青銅器銘文

青銅器名	貝に関わる銘文
孟爵	王、孟に命じて彝伯を寧せしむ。貝を賓せらる。
作冊卣	作冊卣に貝を賜ふ。
御正良爵	御正良に貝を賞す。
鞏劫尊	鞏劫に貝朋を賜ふ。
作冊細卣	夷伯・豊に貝・布を償す
泉伯卣	泉伯、貝を姜より賜はれり。
作冊細卣	公、作冊細に鬯、貝を賜ふ。
敷土卿尊	王、敷土卿に貝朋を賜ふ。
獻侯鼎	獻侯に貝を賞す。
臣辰卣	辰、鬯、貝を賞す。
鬯尊	鬯に貝を賞せらる。
缶鼎	侯、缶に金、貝を賜ふ。
邲父方鼎	休王、邲父に貝を賜ふ。
史懲壺	王、伊伯を呼び、懲に貝を賜はしむ。
雪鼎	雪、貝を孚れり

古代中国における貝貨の特質

呂行壺	呂行、戯ちて貝を孚れり。
趙卣	貝五朋を賜ふ。
小臣鬯	小臣鬯に貝五朋を休せらる。
鼂段	公、鼂に宗彝一、鼎一、貝五朋を賜ふ。
令簋	姜、令に貝十朋・臣十家・鬲百人を賞す。
小臣單觶	周公、小臣單に貝十朋を賜ふ。
叔德簋(段)	王、叔德に臣十人・貝十朋・羊百を賜ふ。
孟卣	孟に鬯、束、貝十朋を賜ふ。
旅鼎	公、旅に貝十朋を賜ふ。
史誥彝	史誥に貝十朋を賜ふ。
庚嬴	貝十朋を賜ふ。
師遽段	王…師遽に貝十朋を賜はしむ。
糸戎卣	貝十朋を賜ふ。
德方鼎	王、徳に貝廿朋を賜ふ。
姜侯旨鼎	王、旨に貝廿朋を賞す。
呂方鼎	王、呂に卣三、卣、貝三十朋を賜ふ。
刺鼎	王、刺に貝三十朋を賜ふ。
效尊	王、公に貝五十朋を賜ふ。公厥の順子效に王の休したまへる貝廿朋を賜ふ。
故段三	段に圭鬯、口、貝五十朋を賞ふ。
小臣静彝	王、貝五十朋を賜ふ。
壘方鼎	公、壘に貝百朋を賞す

出所 白川静『金文通釈』第1輯～第33輯によって、筆者作成